

大学運動部活動における保護者による動機づけ雰囲気 の認知，期待への行動結果に対する保護者の反 応，競技不安の関係

中須賀， 巧
兵庫教育大学大学院学校教育研究科

阪田， 俊輔
環太平洋大学体育学部

田中， 輝海
駿河台大学スポーツ科学部

杉山， 佳生
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/4372019>

出版情報：健康科学． 43， pp. 95-104， 2021-03-25． 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：



— 原 著 —

大学運動部活動における保護者による動機づけ雰囲気認知、 期待への行動結果に対する保護者の反応、競技不安の関係

中須賀巧^{1)*}, 阪田俊輔²⁾, 田中輝海³⁾, 杉山佳生⁴⁾

The relationships between perception to parent-initiated motivational
climates, perception to parental reaction at expected behavior, and
competitive anxiety

Takumi NAKASUGA^{1)*}, Shunsuke SAKATA²⁾, Terumi TANAKA³⁾,
and Yoshio SUGIYAMA⁴⁾

Abstract

The purpose of this study was to examine the relationship between parent-initiated motivational climates, parental reaction at expected behavior, and competitive anxiety in university athletic clubs. The participants were 378 university students (mean age=19.80±1.20 years) who completed the parent-initiated motivational climate questionnaire, the parental reaction at expected behavior scale, and the trait anxiety inventory for sports. The analysis model served as the basis of our study was as follows: The parent-initiated motivational climates was independent variable, parental reaction at expected behavior was mediator, and competitive anxiety was dependent variable. The validity of models was verified using structural equation modeling. The result of the analysis models demonstrated to be valid (GFI=.96, AGFI=.92, CFI=.98, RMSEA=.07). The results of this study suggested the following processes: (1) “Conducive-worry climate” and “Learning-oriented climate” had a positive influence on “Perception of disappointment”, which in turn had positive influence on “Competitive anxiety”. (2) “Conducive-worry climate” and “Learning-oriented climate” had a positive influence on “Perception of supportive reaction”. (3) “Conducive-worry climate” had a direct positive influence on “Competitive anxiety”. (4) “Learning-oriented climate” had a direct negative influence on “Competitive anxiety”.

1) 兵庫教育大学大学院学校教育研究科 Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, Japan.

2) 九州産業大学健康・スポーツ科学センター Health and Sports Science Center, Kyushu Sangyo University, Japan.

3) 駿河台大学スポーツ科学部 Faculty of Sport Science, Surugadai University, Japan.

4) 九州大学大学院人間環境学研究院 Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University, Japan.

*連絡先：兵庫教育大学大学院学校教育研究科 〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942-1

*Correspondence to: Graduate School of Education, Hyogo University of Teacher Education, 942-1 Shimokume, Kato City, Hyogo 673-1494, Japan.
E-mail: nakasuga@hyogo-u.ac.jp

Key Words: motivational climates, expected behavior, competitive anxiety, athletic clubs, university students

(Journal of Health Science, Kyushu University, 43: 95-104, 2021)

はじめに

選手にとって競技不安^{注1)}は、試合中の失敗やミスといった否定的な結果を想起させ、さらにプレー前の消極的な姿勢・思考を高めると言われている¹⁾。また、競技場面における自己効力感(自分がその行動をどの程度効果的に実行できているのかという自信)が選手のパフォーマンス向上に及ぼす影響性よりも、競技不安の喚起が選手のパフォーマンスを著しく低下させる影響性の方が強いことも確認されている²⁾。このように試合前における競技不安は、試合での失敗・敗北の想起や緊張状態の増強だけでなく、試合中の運動パフォーマンスを著しく低下させる主要因となる。また試合前の競技不安の喚起を皮切りに、選手の心身を消耗させ、望まない引退(退部)やチーム内での孤立、バーンアウトなど最悪の事態を招くケースも考えられる。これまで競技不安の喚起要因に関して検討している研究では、他者よりも優れている成績や評価を得ることを好む自我志向性の認知が競技不安と強い関連があること³⁾、「あがり」の原因である「他者への意識(周囲の視線や人前での失敗)」や「性格の弱さ(自己の内面の弱さやネガティブ感情)」を強く感じている選手ほど競技不安も高いこと⁴⁾、そして競技中のネガティブな思考を陳述(自分は迷惑になっていないか、責められていないかなど)している選手ほど競技不安を喚起させること⁵⁾などが確認されている。このように、競技不安の向上・抑制といった研究には、選手の個人内要因(パーソナリティや感情、志向など)に着目するものが多く、選手を取り巻く周囲や環境といった要因から競技不安への影響性についての知見は十分に得られていないのが現状である。

この選手を取り巻く環境要因として、スポーツ心理学の領域では動機づけ雰囲気という概念が注目されている。これは「重要な他者(監督やチームメイトなど)によってつくられる雰囲気」と定義され⁶⁾、他者との比較を通しての達成を重視する成績雰囲気と、

学習や熟達のプロセスを重視する熟達雰囲気の2つの側面があり、周囲が有する目標の違いを構造的に捉えて検討することができる^{7) 8)}。運動部活動における動機づけ雰囲気研究では、コーチやチームメイトをメインとした測定尺度(「コーチの練習支援」、「コーチの能力志向」、「協調」、「承認」、「競争」の5つの下位尺度)が開発され⁹⁾、運動部への適応感¹⁰⁾、競技引退¹¹⁾、そしてセルフハンディキャッピング方略¹²⁾など、様々な心理変数との関係について検討が進められている。それら一連の研究を通して、動機づけ雰囲気をどのように認知しているのか、まただれがつくる雰囲気なのかによって、選手の心理面に異なる影響を与えることが確認されている。しかし、近年の運動部活動の状況や、それに関連する研究を概観すると、選手や監督以外に保護者が選手の意識や行動を規定する存在としても挙げられている^{13) 14)}。つまり、運動部活動に関わる選手の心理的な特徴を把握するためには、監督やチームメイトがつくる動機づけ雰囲気だけではなく、保護者のつくる動機づけ雰囲気も重要になるのではないかと考えられる。White et al.¹⁵⁾は、保護者の存在が選手の動機づけに異なる影響を示すことを仮定し、Parent-Initiated Motivational Climate Questionnaire (以下、PIMCQ)を開発している。この尺度を用いた研究には、スポーツ活動中の行動面(ラフプレーやトラッシュトークなどの好ましくない行動と控室の掃除や倒れている選手の手助けなどの好ましい行動)¹⁶⁾や心理面(内発的動機づけや完全主義傾向)^{17) 18)}との関連について検討されたものがある。それらの研究では、選手に対して保護者が熟達雰囲気で接している方が、スポーツ活動中の好ましくない行動が抑制され、また内発的動機づけも向上する可能性があることが示唆されている。一方、国内の研究では、中学校運動部活動に参加する生徒を対象にPIMCQ¹⁵⁾を参考に日本語版の尺度が作成され、「低努力-成功雰囲気」「心配-不安雰囲気」「学習志向雰囲気」の3下位尺度が確認されている¹⁹⁾。また同

研究の中では、3 下位尺度と競技不安との関係についても検討され、「心配-不安雰囲気」や「学習志向雰囲気」が競技不安に正の影響を与えることが確認されている。このように保護者がつくる動機づけ雰囲気は監督やチームメイトがつくる雰囲気と同様に、選手の心理的側面に何らかの影響を及ぼすことが考えられる。しかし、これまで運動部活動場面における保護者の動機づけ雰囲気に関する国内研究には、中学生を対象とした先述の研究以外に見当たらず、大学運動部活動に参加する学生を対象とした研究の必要性も課題として挙げられている。

次に、競技不安の喚起要因として、本研究では選手が期待された行動を遂行できた場合（あるいは、遂行できなかった場合）に保護者がどのような反応を示すのかを表す「選手に向けた期待への行動結果に対する保護者の反応」にも注目する。これには、肯定的な反応を表す「サポート反応予期」と落胆・狼狽および周囲への自慢といった反応を表す「落胆的反応予期」がある²⁰⁾。渡部ほか²¹⁾は、自分が期待に応えられなかった場合に親が落胆的な反応（「落胆的反応予期」）を示すことを理解している子どもほど、社会的スキルが高かったことや学校内での問題行動が少なかったことを明らかにしている。このことから、保護者の示す反応が肯定的な反応か、落胆的な反応かによって、その後の選手の競技不安に対しても異なる影響を示す可能性があるのではないかと考えられる。しかし、保護者がつくる動機づけ雰囲気を選手がどのように認知しているのか、あるいは、選手自身が期待に応えられなかった際に保護者がどのような反応を示すのか、それらと競技不安の関係についてはこれまで検討されていない。

そこで本研究では、運動部活動における保護者の動機づけ雰囲気、期待への行動結果に対する保護者の反応、競技不安の関係について検討することを目的とした。

方法

1. 調査対象者および調査時期

大学体育会の運動部活動に所属する部員を対象に

20XX 年 8 月上旬から 12 月上旬にかけて質問紙調査を実施し、回答に欠損のなかった 378 名（平均年齢 19.80 ± 1.20 歳）を分析対象とした。対象者の競技種目には野球、バスケットボール、サッカー、ラクロス、アメリカンフットボールなどが含まれている。

2. 調査内容

2-1. 基本属性

フェイスシートにて、基本的属性（年齢、学年）、所属運動部について回答を求めた。

2-2. 保護者による運動部の動機づけ雰囲気

運動部活動における保護者の動機づけ雰囲気の測定には、PIMCQ¹⁵⁾を参考に作成された中須賀ほか¹⁹⁾の保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度の項目を用いた。この尺度は「低努力-成功雰囲気 (4 項目)」「心配-不安雰囲気 (5 項目)」「学習志向雰囲気 (5 項目)」の 3 下位尺度、合計 14 項目で構成されている。回答は、「全然そう思わない (1 点)」、「あまりそう思わない (2 点)」、「どちらともいえない (3 点)」、「かなりそう思う (4 点)」、「とてもそう思う (5 点)」の 5 段階で評定するものであった。

2-3. 期待への行動結果に対する保護者の反応

渡部²⁰⁾の期待への行動結果に対する親の反応尺度を一部修正し、用いることとした。具体的には調査協力者への回答負担軽減を理由に各下位尺度から因子負荷量が高かった (.70 以上) 4 項目をそれぞれ精選し、保護者のサポート反応予期 (4 項目) および落胆的反応予期 (4 項目) の 2 下位尺度、合計 8 項目で構成されている。回答は、「いいえ (1 点)」、「どちらかといえばいいえ (2 点)」、「どちらかといえばはい (3 点)」、「はい (4 点)」の 4 段階で評定するものであった。

2-4. 競技不安

スポーツ競技特性不安尺度²²⁾を用いた。この尺度は、試合前になると不安感情をどの程度感じるのか、その傾向を測定するものである。具体的には、「精神的動揺 (5 項目)」「勝敗の認知的不安 (5 項目)」「身体的不安 (5 項目)」「競技回避傾向 (5 項目)」「自信喪失 (5 項目)」の 5 下位尺度、25 項目から構成されている。項目に対する回答は、「めったにない (1 点)」、「ときどきある (2 点)」、「しばしばある (3 点)」、「い

つもある(4点)」の4段階で評定するものであった。

なお、大学生を対象とした場合の「2-2. 保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度」ならびに「2-3. 期待への行動結果に対する親の反応尺度」の妥当性と信頼性については確認されていないため、それらも併せて検討することとした。

3. 倫理的配慮

調査は、調査の趣旨および測定内容を監督(コーチ、顧問)に説明し、その後、調査協力の許可が得られた運動部に対して行われた。倫理的配慮の説明は、本調査がテストではないこと、大学の成績とは関係がないこと、個人の調査結果の秘密が守られること、調査結果を研究目的以外で公表しないこと、調査内容が強制的ではなく途中で辞退できること、中断しても不利益を被ることは一切ないこと、個人情報に特定されないID番号に変換されることを調査票の表紙に記すとともに、研究代表者もしくは研究協力者が調査協力依頼書をもとに口頭でも行われた。無記名式の調査用紙に不備のない回答をもって同意取得と見なした。

4. 分析モデル

保護者による運動部の動機づけ雰囲気(「低努力-成功雰囲気」,「心配-不安雰囲気」,「学習志向雰囲気」)を独立変数に、期待への行動結果に対する保護者の反応(「サポート反応予期」,「落胆の反応予期」)を媒介変数に、そして競技不安(「精神的動揺」,「勝敗の認知」,「身体的不安」,「競技回避」,「自信喪失」)を従属変数とした分析モデルを設定した(図1)。なお、独立変数から従属変数への矢印は直接的な影響を、それらの変数間に媒介変数を介す矢印は間接的な影響を、それぞれ想定するものである。

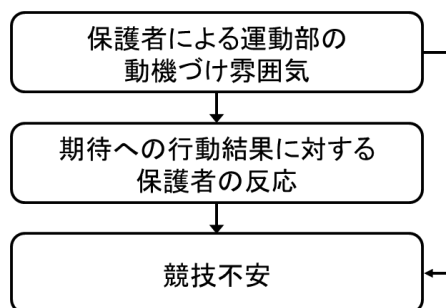


図1 分析モデル

5. 統計解析

「2-2. 保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度」ならびに「2-3. 期待への行動結果に対する保護者の反応尺度」について、まず標本妥当性を Kaiser-Mayer-Olkin の測度(以下、*KMO* とする)と Bartlett の球面性検定(以下、*BS* とする)により検証し、続いて、因子構造を探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)により確認し、最後にクロンバックの α 係数を算出した。なお探索的因子分析では、因子負荷量.40 未満を削除対象項目とした。分析モデルの妥当性検討については共分散構造分析を実施した。モデル採択の判断は、Goodness of Fit Index(以下「*GFI*」と略す)、Adjusted Goodness of Fit Index(以下「*AGFI*」と略す)、Comparative Fit Index(以下「*CFI*」と略す)、Root Mean Square Error of Approximation(以下「*RMSEA*」と略す)の各適合度指標をもとに行うこととし、それらの基準は豊田ほか²³⁾と室橋²⁴⁾に倣い、*GFI* および *CFI* は.90 以上、*RMSEA* は 1.00 以下、そして *AGFI* は *GFI* との差分が小さいこととした。各測定尺度の記述統計量として、平均値、標準偏差、相関係数を算出した。なお全ての分析には、統計パッケージの IBM SPSS Statistics 24.0 ならびに IBM SPSS Amos 24.0 を使用し、有意水準は 5%未満とした。

結果

1. 保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度の妥当性と信頼性

まず標本妥当性を確認するための *KMO* と *BS* の値は、いずれも統計的基準($KMO=.89$, $BS=3508.04$, $p<.05$)を満たしていた。次に先行研究において確認されている 14 項目に対して探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を実施し、因子構造について検討した(表 1)。その結果、第 1 因子は「低努力-成功雰囲気(少ない努力かつ勝利や成功を収めることに関する項目群)」,第 2 因子は「心配-不安雰囲気(不安や心配に関する項目群)」,第 3 因子は「学習志向雰囲気(努力をすることや新たな技能習得に関する項目群)」となり、先行研究と同様の 3 因子構造が確認された。なお、因子負荷量.40 未満を示す項目は確認されなかった。続いて、各下位尺度の信頼性を検討する

ために Cronbach の α 係数を算出したところ、 $\alpha=.86-.94$ であり、内的一貫性があることも確認された。以上のことから、大学生を対象とした場合の保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度の妥当性と信頼性は概ね認められた。したがって、以降の分析には「低努力-成功雰囲気」、「心配-不安雰囲気」、「学習志向雰囲気」の 3 因子を用いることとした。

2. 期待への行動結果に対する保護者の反応尺度の妥当性と信頼性

まず標本妥当性を確認するための KMO と BS の値は、いずれも統計的基準 ($KMO=.81$, $BS=1592.52$, $p<.05$) を満たしていた。次に先行研究から選択した 8 項目に対して探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) を実施し、因子構造について検討した (表 2)。その結果、渡部²⁰⁾と同様に、第 1 因子は親の肯定的な反応を表す項目群からなる「サポート反応予期」、第 2 因子は親の落胆・狼狽および周囲への自慢といった反応を表す項目群からなる「落胆的反應予期」という、2 因子構造が確認された。なお、因子負荷量 .40 未満を示す項目は確認されなかった。続いて、各下位尺度の信頼性を検討するために Cronbach の α 係数を算出したところ、「サポート反応予期」は $\alpha=.89$ 、「落胆的反應予期」は $\alpha=.85$ であり、内的一貫性があるこ

とも確認された。以上のことから、大学生を対象とした場合の期待への行動結果に対する保護者の反応尺度の妥当性と信頼性は概ね認められた。したがって、以降の分析には「サポート反応予期」と「落胆的反應予期」の 2 因子を用いることとした。

3. 各尺度の基本統計量

各下位尺度の平均値、標準偏差ならびに相関係数は表 3 に示す。保護者による運動部の動機づけ雰囲気の下位尺度、期待への行動結果に対する保護者の反応の下位尺度、競技不安の下位尺度との相関係数については以下のとおりである。

まず、保護者による運動部の動機づけ雰囲気の下位尺度 (「低努力-成功雰囲気」、「心配-不安雰囲気」、「学習志向雰囲気」と期待への行動結果に対する保護者の反応の下位尺度 (「サポート反応予期」、「落胆的反應予期」) には、すべて有意な正の相関 ($r=.20-.40$) が認められた。続いて、「低努力-成功雰囲気」、「心配-不安雰囲気」ならびに「サポート反応予期」、「落胆的反應予期」は、競技不安の「精神的動揺」、「勝敗の認知」、「身体的不安」、「競技回避」、「自信喪失」と有意な正の相関 ($r=.15-.41$) が認められた。「学習志向雰囲気」は「精神的動揺 ($r=-.10$)」、「競技回避 ($r=-.13$)」との間に有意な負の相関が認められた。

表 1 保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度の因子構造と信頼性係数

質問項目	F1	F2	F3
F1. 低努力-成功雰囲気 ($\alpha=.92$)			
私の親は、私が本気を出さなくても試合に勝てることに満足していると思う	.88	.01	.01
私の親は、私が努力なしでも試合に勝てることに満足していると思う	.94	-.02	.03
私の親は、努力なしで試合に勝てることが重要であると考えていると思う	.76	.09	-.04
私の親は、私が最小限の努力で多くの成果を上げるべきと考えていると思う	.77	.06	.00
F2. 心配-不安雰囲気 ($\alpha=.88$)			
私の親は、私が得意でないことをすることを心配してしまう	.24	.60	-.04
私の親は、私が他の選手と同じようにできないことを嘆(なげ)いてしまう	.15	.72	-.03
私の親は、私が試合でミスをしてしまわないかを心配していると思う	.10	.56	.20
私の親は、私が試合中にミスすることを恐れていると思う	-.10	.93	.04
私の親は、ミスは悪いものであり、試合中にミスすべきでないと考えていると思う	.00	.81	-.09
F3. 学習志向雰囲気 ($\alpha=.86$)			
私の親は、私が新しいことができたとき喜んでくれると思う	-.07	-.04	.88
私の親は、努力して技術が向上したとき満足してくれていると思う	.02	-.04	.87
私の親は、私の技術が向上しているかを気にしていると思う	.06	.15	.62
私の親は、試合中の失敗も重要な学びの一つだと考えていると思う	.06	-.08	.72
私の親は、人に教わる前に、自分自身で考えることが大切であると考えていると思う	-.05	.08	.68
F1	—	.72	-.08
F2		—	-.10
F3			—

各尺度内の相関では、保護者による運動部の動機づけ雰囲気「低努力-成功雰囲気」と「心配-不安雰囲気」との間には有意な正の相関($r=.71$)が確認された。また「サポート反応予期」と「落胆的反応予期」との間にも有意な正の相関($r=.77$)が確認された。競技不安に関してはすべての下位尺度間に有意な正の相関($r=.65-.84$)を示した。

4. 分析モデルの検証

図2(モデル内の楕円は潜在変数, 長方形は観測変数)は, 保護者による運動部の動機づけ雰囲気, 期待への行動結果に対する保護者の反応, 競技不安の関係について共分散構造分析を行った結果である。分析の結果, モデルの妥当性を示す適合度は $GFI=.96$, $AGFI=.92$, $CFI=.98$, $RMSEA=.07$ であり, 基準をみた

す値が確認された。

モデル内のパスについてみると, まず競技不安に対する間接的な影響は, 「心配-不安雰囲気」と「学習志向雰囲気」が「落胆的反応予期」に正の影響(順に $\beta=.31, .41$)を示し, その「落胆的反応予期」が「競技不安」に正の影響($\beta=.23$)を示した。「心配-不安雰囲気」と「学習志向雰囲気」は「サポート反応予期」(順に $\beta=.34, .40$)に正の影響を示したが, 「サポート反応予期」から「競技不安」への有意なパスは示されなかった。続いて, 競技不安への直接的な効果について, 「心配-不安雰囲気」からは「競技不安」に正の影響($\beta=.26$)を示し, 「学習志向雰囲気」からは「競技不安」に負の影響($\beta=-.20$)を示した。

表2 期待への行動結果に対する保護者の反応尺度の因子構造と信頼性係数

質問項目	F1	F2
F1. サポート反応予期	($\alpha=.89$)	
自分が期待に応えられなかった場合, 親は励ましてくれると思う	.88	.00
自分が期待に応えられなかった場合, 親はフォローしてくれると思う	.86	.04
自分が期待に応えられなかった場合, 親は慰めてくれると思う	.78	.05
自分が期待に応えられなかった場合, 親は次に頑張れば良いと思ってくれると思う	.75	-.09
F2. 落胆的反応予期		($\alpha=.85$)
自分が期待に応えられなかった場合, 親はがっかりすると思う	-.06	.82
自分が期待に応えられなかった場合, 親は悩むと思う	.05	.77
自分が期待に応えられなかった場合, 親は焦りを感じると思う	-.06	.75
自分が期待に応えられなかった場合, 親は悲しむと思う	.05	.74
因子相関行列	F1 —	.21
	F2 —	—

表3 各尺度の平均値, 標準偏差, 相関係数

	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
保護者による運動部の動機づけ雰囲気												
1. 低努力-成功雰囲気	12.08	4.91	—									
2. 心配-不安雰囲気	9.10	4.49	.71 *	—								
3. 学習志向雰囲気	19.56	3.83	-.04	-.04	—							
期待への行動結果に対する保護者の反応												
4. サポート反応予期	10.12	2.64	.33 *	.20 *	.39 *	—						
5. 落胆的反応予期	9.98	2.43	.30 *	.20 *	.40 *	.77 *	—					
競技不安												
6. 精神的動揺	10.07	3.72	.28 *	.23 *	-.10 *	.16 *	.21 *	—				
7. 勝敗の認知	11.59	3.68	.25 *	.15 *	-.01	.23 *	.22 *	.72 *	—			
8. 身体的不安	9.34	3.98	.32 *	.30 *	-.09	.18 *	.23 *	.78 *	.67 *	—		
9. 競技回避	8.68	3.74	.41 *	.38 *	-.13 *	.19 *	.22 *	.79 *	.65 *	.76 *	—	
10. 自信喪失	10.85	4.19	.26 *	.16 *	-.10	.16 *	.19 *	.84 *	.80 *	.68 *	.75 *	—

* $p < .05$

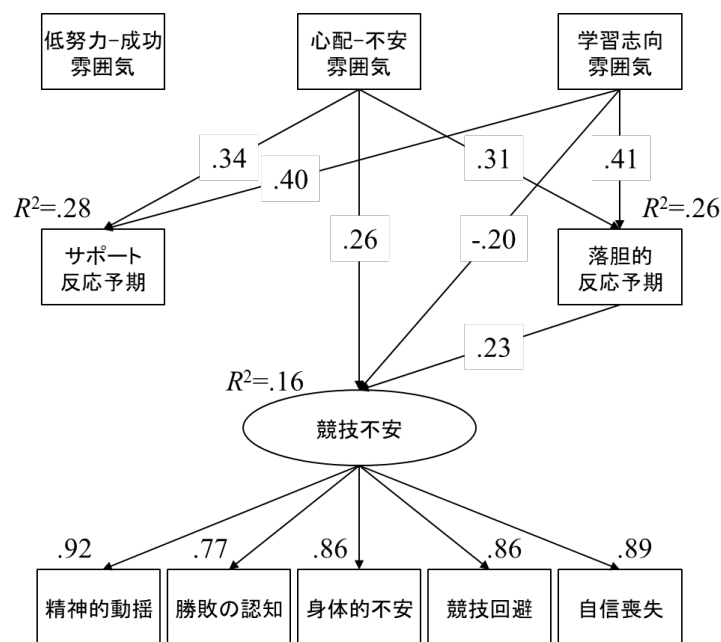
「心配-不安雰囲気」から「競技不安」への直接効果 ($\beta=.26$) と「心配-不安雰囲気」が「落胆的反応予期」を媒介し、「競技不安」に影響を与える間接効果 ($.31 \times .23 \doteq .07$) であり、その効果は直接効果の方が大きい値を示した。また「学習志向雰囲気」から「競技不安」への負の直接効果 ($\beta=-.20$) と「学習志向雰囲気」が「落胆的反応予期」を媒介し、「競技不安」に影響を与える正の間接効果 ($.41 \times .23 \doteq .09$) であり、その効果は直接効果の方が大きい値を示した。なお、説明力を示す決定係数 (R^2) は、「サポート反応予期」は $R^2=.28$ を示し、「落胆的反応予期」は $R^2=.26$ を示した。そして最終の「競技不安」は $R^2=.16$ を示した。

考察

本研究では、運動部活動における保護者の動機づけ雰囲気、期待への行動結果に対する保護者の反応、競技不安の関係について検討することを目的とした。まず、保護者による運動部の動機づけ雰囲気尺度ならびに期待への行動結果に対する保護者の反応尺度に関して、大学生を対象とした場合の妥当性と信頼性は概ね認められた。続いて、運動部活動における保護者の動機づけ雰囲気、期待への行動結果に対する

保護者の反応、競技不安の関係について検討した結果について考察を進める。

まず学習志向雰囲気、落胆的反応予期、競技不安の関係については、「学習志向雰囲気」から「競技不安」への直接的効果は有意な負の影響を示した。これは、「学習志向雰囲気」を強く認知している選手ほど、「競技不安」が抑制されることを意味している。「学習志向雰囲気」とは、努力によるスキル向上や新たなスキル習得に対して親がどの程度満足しており、喜んでいるのかに関する選手の認知を示すものであり、いわゆる熟達雰囲気の側面に相当する概念と言える¹⁹⁾。例えば、自分が新たな技能習得に向けて努力している姿を親が認めてくれることや喜んでくれることは、競技に打ち込む選手の自信になるのではないかと考えられる。また、たとえ試合中に失敗しても、それが学習の一部であると考えてくれるため、選手は失敗やミスに対する脅威や恐怖感を持たず、安心して競技に専念できるのではないかとと思われる。そういった選手が自信を持ち、安心して取り組める保護者の雰囲気づくりは、選手の不安を喚起することなく試合や大会に臨むことができるのではないかと考えられる。



モデルの適合度

GFI=.96, AGFI=.92, CFI=.98, RMSEA=.07

†パス上の数値はすべて標準化係数。
††モデル内の観測変数の誤差変数は省略。

図2 保護者による動機づけ雰囲気、期待への行動結果に対する反応、競技不安の関係

一方で、「学習志向雰囲気」が「落胆的反応予期」に正の影響を示し、その「落胆的反応予期」が「競技不安」に正の影響を示した。この結果は、「学習志向雰囲気」を強く認知する選手が、保護者の「落胆的反応予期」を高く認知した場合に「競技不安」は高まることを示唆している。例えば、自分が努力してもスキル向上に至らなかった場合や新たな技能習得ができなかった場合は、自分を認めてくれている親をがっかりさせてしまう、悩ませてしまうなど親の落胆する姿を予期(想像)するのではないかと考えられる。そういった親を落胆させないために決して試合や大会で失敗できない、絶対に喜ばせたいという強い思いを抱くが、同時にその期待に応えることができないかもしれないという重圧から選手に過度な不安感や緊張感を与えるのではないかと推察される。従来の運動部における動機づけ雰囲気研究では、コーチやチームメイトがつくる熟達雰囲気あるいはそれを構成する下位尺度は肯定的要因として捉えられてきた。しかし、本研究の結果ならびに中学生を対象とした先行研究¹⁹⁾において、「学習志向雰囲気」が部分的ではあるが不安を高める要因になり得ることも確認されている。このように、運動部に直接的なかわりを持つ存在(コーチの指導や選手同士のミーティングなど)以外のところでつくられる雰囲気は、たとえ熟達の要素を含む雰囲気であっても選手にとって、必ずしも良好な機能を持つわけではないことも示唆された。

続いて、心配-不安雰囲気、落胆的反応予期、競技不安の関係について、「心配-不安雰囲気」から「競技不安」への直接的効果は有意な正の影響を示した。これは、保護者からの「心配-不安雰囲気」を強く認知している選手ほど、試合前における不安も高まることを意味している。「心配-不安雰囲気」とは、試合や練習でミスをしないか、他の選手と同じようにプレーできるかなど、親が自分のプレーに対してどの程度心配しており、不安に思っているのか、その認知度を示すものである。中学生を対象にした先行研究¹⁹⁾においても「心配-不安雰囲気」は、自信喪失や精神的動揺などを高めることが確認されていることから、年代を問わず選手の不安を喚起させる主要因になる

と考えられる。また「心配-不安雰囲気」は、「落胆的反応予期」に正の影響を示し、その「落胆的反応予期」が「競技不安」に正の影響を示すことも確認された。これは、保護者の不安や心配する雰囲気を強く認知している選手ほど、自分が試合や大会で期待に応えることができなかった場合、落胆する保護者の姿を予期(想像)する傾向があり、さらにそのような保護者の落胆する姿は競技への不安度を高めることを示唆している。

最後に「心配-不安雰囲気」や「学習志向雰囲気」は「サポート反応予期」に正の影響を示したが、「サポート反応予期」から「競技不安」への有意なパスは示されなかった。これは、「心配-不安雰囲気」や「学習志向雰囲気」を強く認知していても、そこで期待に応えられなかった場合に保護者からの励ましやフォローなどサポートしてもらえることがわかっていれば、競技への不安を高めないことを示唆している。

以上のことから、保護者にとって、子どもが競技に打ち込む姿、そこで試合や大会で活躍する姿を目にするのは嬉しいことであり、時に自分自身のことのように誇りに感じることもあるだろう。しかし、期待するがゆえに芳しくない結果(試合での敗北、ミス、失敗など)に対して落胆する保護者の姿は、選手の競技に対する不安を助長させることにもつながる可能性がある。保護者は、選手である子どものプレーや結果が期待通りでなかったとしても、常に肯定的反応で接すること(励ましやフォローなど)を目指す必要があるのではないかと考えられる。

注釈

注1)競技不安とは、「スポーツ競技における不安感や緊張感などを伴った心理的・身体的反応、およびその特性」と定義されており²⁵⁾、スポーツ競技場面において認知される不安のことである。

付記

この研究は、笹川スポーツ財団の「笹川スポーツ研究助成」の助成金を受けて実施しています。

参考文献

- 1) 有富公教・外山美樹 (2017) スポーツ競技児童思考尺度の作成および妥当性の検討ー競技中に生じる思考の個人差の理解に向けてー. スポーツ心理学研究, 44 (2), 105-116.
- 2) 高野健文・城仁士 (2005) 自己効力感と競技不安から見た競技パフォーマンスの心理モデル. 神戸大学発達科学部研究紀要, 13 (1), 71-78.
- 3) 早乙女誉・山田陽介・森原徹 (2016) 女子プロ野球選手の職務満足感および目標志向性と競技特性不安の関係. Japanese Journal of Elite Sports Support, 7, 1-10.
- 4) 津田恭充 (2013) 競技不安の促進・低減要因ーバスケットボール選手を対象とした調査ー. 愛知学泉大学・短期大学紀要, 48, 105-111.
- 5) 栗林千聡・中村菜々子・佐藤寛 (2015) ジュニアアスリートの競技不安に対する認知行動療法の基礎研究. 2015 年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書, 66-72.
- 6) 西田保・小縣真二 (2008) スポーツにおける達成目標理論の展望. 総合保健体育科学, 31 (1), 5-12.
- 7) Ames, C. and Archer, J. (1988) Achievement goals in the classroom: Students' learning strategies and motivation processes. Journal of Educational Psychology, 80, 260-267.
- 8) Seifriz, J. J., Duda, J. L., and Chi, L. (1992) The relationship of perceived motivational climate to intrinsic motivation and beliefs about success in basketball. Journal of Sport and Exercise Psychology, 14, 375-391.
- 9) 伊藤豊彦 (2001) 高校生における運動部の動機づけ構造の認知に関する研究. 運動心理学の展開. 遊戯社, pp. 148-162.
- 10) 中須賀巧・阪田俊輔・田中輝海 (2018) 大学運動部の動機づけ雰囲気, 個人・社会志向性, 部活動適応感の関係. スポーツ産業学研究, 28 (2), 163-175.
- 11) 中須賀巧・阪田俊輔・杉山佳生 (2019) 運動部における動機づけ雰囲気と競技引退に対する態度の関係-中学生と大学生の特徴について-. 健康科学, 41, 51-58.
- 12) 森年雅子・伊藤豊彦 (2010) スポーツにおける目標志向性とチームの動機づけ構造がセルフ・ハンディキャッピングに及ぼす影響. 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 44, 49-57.
- 13) 安藤美華代 (2018) 学校運動部活動指導者の心理的負担感と対処に関する検討. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 8, 45-57.
- 14) 井上則子 (2010) 中学生の運動部活動を支える母親の心理. 津田塾大学紀要, 42, 119-133.
- 15) White, S. A., Duda, J. L., and Hart, S. (1992) An exploratory examination of the parent-initiated motivational climate questionnaire. Perceptual and Motor Skills, 75, 875-880.
- 16) Lavoie, N. M. and Stellino, M. B. (2008) The relation between perceived parent-created sport climate and competitive male youth hockey players' good and poor sport behaviors. The Journal of Psychology, 142(5), 471-495.
- 17) Appleton, P. R., Hall, H.K., and Hill, A. P. (2011) Examining the influence of the parent-initiated and coach-created motivational climate upon athletes' perfectionistic cognitions. Journal of Sports Sciences, 29(7), 661-671.
- 18) Kolayış, H., Sari, İ., and Çelik, N. (2017) Parent-initiated motivational climate and self-determined motivation in youth sport: How should parents behave to keep their child in sport ?. Kinesiology, 49(2), 217-224.
- 19) 中須賀巧・阪田俊輔・田中輝海 (2020) 中学校運動部活動における選手が認知する保護者による動機づけ雰囲気が競技不安に与える影響. 兵庫教育大学研究紀要, 56, 39-44.
- 20) 渡部雪子 (2013) 期待への行動結果に対する親の反応についての予期尺度作成の試み. 立正大学心理学研究所紀要, 11, 67-73.
- 21) 渡部雪子・濱口佳和・新井邦二郎 (2014) 中学生における親の期待の認知と外的適応との関連. カウンセリング研究, 47 (3), 127-136.

-
- 22) 橋本公雄・徳永幹雄・多々納秀雄・金崎良三・梅田靖次郎(1986) 競技不安尺度に関する研究(3) —特性不安尺度の信頼性・妥当性について—. スポーツ心理学研究, 13 (1), 48-51.
- 23) 豊田秀樹・前田忠彦・柳井晴夫(1992) 原因をさぐる統計学 共分散構造分析入門. 講談社, pp. 174-177.
- 24) 室橋弘人(2003) 分析のよさを評価する-適合度指標概論-. 豊田秀樹編, 共分散構造分析 疑問編. 朝倉書店, pp. 122-125.
- 25) 橋本公雄・徳永幹雄・多々納秀雄・金崎良三(1993) スポーツにおける競技特性不安尺度(TAIS)の信頼性と妥当性. 健康科学, 15, 39-49.